

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

CSR活動としての企業の環境教育(平成18年度 千代田学 報告書)

田中, 充 / 長野, 浩子 / 山田, 元紀

(出版者 / Publisher)

法政大学地域研究センター千代田学プロジェクト

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

2007-03

第3章
千代田区立昌平幼稚園
事例報告

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

平成18年度の千代田学では、法政大学地域研究センターは課題のひとつとして、区内公立学校において企業と連携して行なう環境教育の実践事例の実施があり、平成18年度において2件の実践事例を行った。本章では、第二の事例である千代田区立昌平幼稚園について報告する。

第1節 昌平幼稚園で実施にいたる背景

千代田区立昌平幼稚園の実践事例は、2005年（平成17年）10月24日に、地域研究センターが主催した「企業が参画する環境教育に関する研究会¹」で昌平幼稚園から企業との連携による環境教育の実験的取り組みの依頼が寄せられたことに端を発して実施することになった。しかし、千葉大学教育学部の藤川先生も幼稚園に関しては専門外ということでそのときには幼稚園での企業と連携して行なう環境教育実現の可能性はほとんど無かったといつてよい。

一方、平成17年度の千代田学で法政大学地域研究センターが取材した埼玉県教育委員会が主催する「学校と民間との協働プラン開発事業」として学・民ジョイントプロジェクト²の平成17年度の成果報告会が平成18年2月に開かれた。その報告会でNPO法人臨床美術協会（以下、臨床美術協会という）が発表した、人間の右脳を活性化させて描く「感性画」の手法を取り入れた埼玉県春日部市立幸松小学校の総合的学習の時間での「アートから福祉へ」の報告を聞いて、幼稚園児への環境教育の実験的取り組みとして「感性画」を採用して行う環境教育の可能性について、臨床美術協会に相談を持ちかけた。

「感性画」の手法の環境教育への応用は臨床美術協会も初めての取り組みであり、「感性画」の新たな可能性の追求の一環として地域研究センターと共同開発することに同意した。そこで、平成18年9月に昌平幼稚園を訪問し、幼稚園児を対象に行う環境教育の手法として「感性画」を採用することを園長先生と副園長先生に提案し、了解を得ることになった。

なお、昌平幼稚園での主体間連携は次のページの表1の通りである。

¹ 2005年（平成17年）度の千代田区内の小学校の環境教育についての調査研究についての中間報告と千葉大学教育学部 藤川大祐助教授に、「企業と連携した授業実践の成果と課題について」の講演を依頼して行なった。

² 平成17年度千代田学報告書資料編に収載

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

表1 関係主体と役割

主 体	役 割
地域研究センター	企画、調整、運営、管理、報告
臨床美術協会	企画、プログラム開発、授業運営、人材派遣、教材開発、教材提供
昌平幼稚園	企画、授業提供、クラス管理、授業協力
大学生	授業進行補佐、教材開発協力

表1でも分かるように、地域研究センターの役割は第三者機関の機能が求められている。また、昌平幼稚園の事例ではNPO法人ACEは直接的な協力ではなくプログラムの監修にとどまった。

第2節 昌平幼稚園での環境教育の概要

実施に先駆けて、昌平幼稚園、臨床美術、センターおよびACEの関係者が数度にわたり検討して、平成18年11月10日に最終案として昌平幼稚園へ以下の企画を提示した。

「千代田区立昌平幼稚園における環境教育のねらいと手法について」

1、幼児を対象とした環境教育を行なう背景

平成12年度に施行された「幼稚園教育要領」改訂版では、幼児の表現活動について、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と規定されました。

一方、現代の幼児を取り巻く生活から自然が失われているといわれていますが、幼児の「環境」への活動は自然的環境も含めて幼児を取り巻く環境要素を認識するところから始まるとされています。そこでの幼児の認識活動は幼児の周辺に存在しているさまざまな対象物の感知は五感を使って行なわれ、また周囲の環境の刺激をうけつつ、自分の周囲の環境にかかわる際にさまざまな遊びを見つける、といわれています。

そこで、千代田区立昌平幼稚園で環境教育を実施するにあたり自然の構成要素として最も重要なもののひとつであり、ごく身近に存在する「水」をとりあげます。今回の環境教育の企画は、身近でありながらとかく認識の対象とされにくい「水」を取り上げ、水との楽しい遊びの体験を通して園児たちが五感のすべてを動員して表現したいという気持ちを表現活動に結び付ける支援をおこない作品（感性画）の完成を目指します。

2、テーマ

「水とわたし」

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

3、「テーマ」のネライ

水はほかのすべての生き物と同様に人間が生存するために不可欠です。一般的に人間は10日間食べなくても生存できますが、水が無いと8日間しか生きることができません。けれども、都市生活者にとって、水は水道の蛇口から無限に供給されるものであると思われるし、ペットボトルの水もお金さえあればどこでも手に入れることができます。このように、無限に存在し、いつでもどこでも手に入れることのできる水は、わたしたちにとって、あまりにも身近な存在でありすぎて日常的に水を意識することはありません。けれども水が無くなったら、とりわけ都市生活者である私たちの生活そのものが成り立たなくなるのは明らかです。このように、水は日常生活にとって不可欠なものであるにもかかわらず、私たちは、水についてその重要性を日常においては意識することはありません。この点に関しては、幼稚園児も大人も大差がないと思われます。

そこで、「持続可能な社会の構築」を担う次世代のこどもたちが、未来にわたり私たちの生活に欠かすことのできない水ときちんと向き合いながら成長してゆくために、水の持つ不思議な側面を体験を通して実感しそこから得たものを「感性画」という手法を用いて表現することで水に限らず自然環境全般への意識化をはかることをねらいとします。つまり、水を実感しそれを表現したものを自分と他者との間において共通して理解し認識できる対象とするためにはそれを言語化し、水との関係を漠然としたものではなく不可欠で確かなものとするための意識化のプロセスを幼児のための環境教育と位置づけて行ないます。

こうした一連の作業の持つ意味は、水を実感しそれを感性画の手法で表現する、次にそれを言語化することで水を意識し水との良好な関係をつくりあげ、そこから自らも生き物として水への深い共感と理解と認識を幼児一人ひとりがしっかりと身につけることをねらいとし、千代田区立昌平幼稚園で行なう環境教育の素材に水をえらび、テーマを「水とわたし」と命名しました。

今回の環境教育の授業は4回にわたり実施し、内容的には実践的体験的であるとともに園児同士あるいは園児と関係者間の作品を通してのコミュニケーションを重視した内容といたします。

以上をまとめると次のようになります。

- ・園児が「水」の多様性に気づくことができる
水の「変化」や「変容」など
- ・園児が「水」を意識することができる。
水の「質」や「関係性」など
- ・園児が「水」に興味・関心を持つことで関係性を構築できる
水の新たな側面にふれ、新しい「視点」や「視野」を獲得する

4、授業法

水をテーマにして、「感性画」の手法を取り入れて行ないます。

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

5、授業実施計画（案）

時間	内容	備考
<p>【1回】 9.30 ～ 11.30</p>	<p>1月15日実施</p> <p>①「水」に気づく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水についてのお話し、および質問などをする。 (きっかけ作り 例、雨音などについて) ・子供たちに園内にある「水」を意識させる。 ・探した「水」を観察する。 (探した場所、色、におい、など) ・水の特性にふれる。 (透明、映り込み、など) <p>②感性画の基礎練習(五感を使って描く)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水温(冷たい水と温かい水)、手触り、音(遊び感覚)、味、のどごし、など。 ・色の選択を考える。 ・道具を使わず自分の指や手のみで制作を進める。 	
<p>【2回】 9.30 ～ 11.30</p>	<p>1月22日実施</p> <p>①水の特性にふれる(表面張力について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水を注ぐ(こぼさないように) ・こぼさないように触れる。 ・表面張力の感触を確かめる。 <p>②再度、五感から色を選択する。</p> <p>③水を描く(a) (Solo imprint): 1週間観察(その後ファイル) (Duo imprint): 1週間観察(その後ファイル)</p> <p>④水を描く(b) (Blot line): (乾燥後ファイル) (Ooze line): (乾燥後)ファイル</p>	
<p>【3回】 9.30 ～ 11.30</p>	<p>1月29日実施</p> <p>①水との共同作業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の水の存在を考える。 氷、水蒸気、湿気など ・外に出る、冬の空気の乾燥(吐く息の白さ)についてなど。 <p>③水を描く(c) (Drip track): (乾燥後ファイル) 遊び感覚、ガラスに息を吹きかける。</p>	

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

	④水を描く(d) (Water dance): (台紙に貼り展示する)	
【4回】	2月5日実施	
10.45	「作品を通して『水』に対する考えやコミュニケーションを試みる」	
～	①水にまつわる様々な話をする。(講師+教師)	
12.15	②出来上がった作品の鑑賞会	
	・講師の個別的な感想後、お互いに感想や意見を交換する。	
	・父兄も参加し感想を述べ合う。	

6、本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、平成18年度千代田学の助成を千代田区から受けて行うものであり、関係する以下の主体の協働により実施します。

法政大学地域研究センター千代田学プロジェクト

NPO 法人臨床美術協会

千代田区立昌平幼稚園

法政大学人間環境学部、社会学部の大学生

昌平幼稚園側は上記の提案を受けて検討を行なった結果受け入れを決定した。提案にもあるように、実施時期は平成19年1月から2月にかけて毎週月曜日の午前中を使って4回にわたり実施した。昌平幼稚園児は、3、4、5歳児それぞれ10名であり、授業の対象は全員である。

第3節 幼稚園での環境教育の課題と展望

幼稚園児を対象とした環境教育では先例の無いきわめて異例の手法であり、関わる主体も多様であるなど、従来にはない環境教育の実践となった。こうした取り組みへの評価はきわめて困難であるが、後日関係者が一同に会して振り返りと将来に向けての課題と展望について検討を行なった。当日の概要は以下のとおりである。

以下は平成19年2月5日に、昌平幼稚園で実施した環境教育にかかわった昌平幼稚園関係者、臨床美術関係者、センター関係者による討論を要約したものである。

(授業全般について)

幼稚園の生活のなかでいろいろな場面で出てくる子どもたちの表現を如何に表現させるかが教材研究であり、今回の取り組みはこれまでに全く経験したことがない手法であったし、新たな教材としてすごくたくさんのお話を学べた。

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

しかし、幼児にとってあの限られた時間のなかで、今回の授業のネライは「水」をテーマにして水と自己との関係について感じたものを子どもたちに表現させようということだったがプログラムとしてはかなり難しい内容であったと思う。

水の味を表現するという経験が初めてあり、それを表現するのはかなり難しい。水に触れることに関していろいろな感覚で試す機会がもっとあったら子どもたちのイメージももっと膨らんだのではないとおもうが、4回のセッションを継続的に生活のなかでつなげられたらよかった。

4回の授業の後での園児たちの変化などについて、3才児であったが、お茶を飲むときに、今までそんなに十分味わうというのは、たぶんしてこなかったと思う。けれども、授業を受けたあとで口に含んで味わうということを実感してみたいである。それから、面白かったのがうがいをしたときに水を口に含んで、水道の水と味が違うって言っていた。

このお水はどこから来ているお水だろう、などという話を3才児がしていたがちょっと驚いたし、うれしかった。こうしたわずかなことがきっかけでこんなに意識するようになるというのを認識することができた。

「水はどこからやってくるの?」と子どもたちに聞いたときに、ほとんどの園児たちは「蛇口」と答えていたが、そういう非常に短絡というか、画一的な一つのパターンで水を認識していたと思う。実はそうした答えは当たり前だと思うが、環境教育というか、環境のことを考えたときに、そこを少し変えたいなということが今回の狙いの一つであった。そうした先入観や意識は大人になってしまうとなかなか変えにくい。

そこで幼児の環境教育だとすれば、そのあたりに少し意識が向かってくれるような、あるいは広がりを持つ多様な水の側面を意識できるような、そんなものを子どもたちに伝えたかったが、今回の実験的な取り組みでそういうことが少し実現できたのかなと思うが、こうした見解は企画した側の自己満足かもしれない。

子どもたちに水を自分とのかかわりに中において意識してもらうことで、水はどこから来るのかということに気持ちが向いてゆくことの先に期待したいことは、水は大事ななければならないんだという意識につながっていくのではないか。そういう意味で、幼稚園児への環境教育の必要性や重要性というのがあるのではないか。環境教育を行なう側がそういう意識を持つことにより、子どもたちの水に対する違った意識を持ってくれるきっかけになるのではないかと思う。

今回のプログラムは全体として内容が盛りだくさんすぎたとは思わないが、あえて反省するとすれば1回ごとのレッスンの時間配分が子どもたちの年齢によって興味の度合いが違うので、そのあたりの配慮が必要であった。第一回目のレッスンは変化や動きがあった。それも今までになかったような、動きを表現することを子どもたちも楽しんでた。ただ、それが水の音を聞いてイメージしたものを表現していたかどうかは別として、その行為がすごく繰り返されて変化があって、短い時間で変化していくことがすごく楽しめたように思う。子どもたちに一回目の授業の感想を聞いたときに、音を聞いて絵を描いたのが楽しかったという意見が多かったのは、プログラム自体が面白かったのかなという印象がある。

あとは、絵を描いている最中にあまり話しかけたりしなかったが、子どもが自分の表現

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

した色の具合とかを、先生方に共感してもらいたい気持ちがすごくあるというのを感じた。子ども1人あたりに対して先生が何人くらい必要なのか、適切な人数は何人なのか検討の必要があると思う。また担任よりも、絵の指導をしてくれた先生に声をかけてもらいたいという子どもたちの承認願望がかなり強いことを感じた。

今回のように感じたことを表現するというのは初めての経験であり難しい体験であるとおもう。特に描画に関しては、概念形成ができあがってきて、そういう絵が描けるようになった喜びに満ちている時期だから、あえてまたそういう抽象的な絵を描くことに対する抵抗はかなりあったように思う。どういうふうに表現するか、逆にわからない。描いたときに不安を感じていてよけい認めてもらいたいと思ったのではないか。これでいいんだろうかという不安が子どもたちのなかにすごくあったと思われる。

個人的な感想として今回のプログラム内容は難しかったと思う。むしろ、小学校高学年ぐらいの内容だったのではないか。幼稚園で実施する際には、今回の経験を踏まえて、子どもたちの発達段階に合わせた適切な内容のプログラムの開発が望まれる。

水の音を聞いてそれをイメージして描くというのは非常に難しい。たとえば自分が感じたことを具体的な言葉でたぶんイメージできない。言葉の表現はまだ難しい。大人でも難しいので、たとえば「ポトン、とかわいい小さな音がした」とか、具体的なそういう言葉で出てくると、あ、かわいいなって表現できる。その感じ方について自分がどう感じたかというのを頭の中で組み立てられないから表現するというのは難しいということを感じた。

しかし、あの内容を考えたときに、1滴水を落として、それをいったん言葉にしてしまうと、ポチョン、ポトンというようになるのでそのように言葉にしてから描くと絵そのものが決まってしまう。そこで、あえて言葉にしないで音を聞いてイメージして描くという方向ですすめてきた。言葉にしないで、水と私とのつながりをどこまで理解できるかというのは判断が難しい。行為そのものを楽しんで、1滴水とか、勢いよく落ちる水とか、そういうのを感覚的に殴り描きさせる。そこを探って深みのある表現まで持っていくというのはやっぱり相当難しい。

全部を2時間の授業の中でこなすのはかなり無理があり、1年間通して教育する必要がある。さらに、幼稚園から小学校、中学校と継続して行なう。せめて幼稚園でやるのであれば、長期の見通しのなかでの1コマというかたちで小学校などとの連携を深めておく必要がある。けれども、今回の授業から子どもたちは水の大切さ、1滴水もすごく大切というのを感じられたように思う。

道具といったら水だけだが、あれだけ子どもたちが面白がってくると、逆に大人のほうは不思議に思えてくるし、あそこまで感動してもらえるというのは意外であり、それが一番印象に残った。最後のときに紙の上に水を少しスプーンにすくってゆっくりこぼして水が盛り上がったのをみて、すごく子どもたちが感動しているというか、大騒ぎしていたので、こんなことで子どもたちが感動し、大騒ぎしながらわくわくしている様がすごく印象的だった。これは前にミズカンナの葉の上で水が丸くなるのを見ていたから、紙の上でも水が盛り上がるのを体験できたという感動なんだと思う。このことはミズカンナの葉の上の水と紙の上の水という二つの現象をつなげて考えることができたことを意味してい

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

ると思われ、子どもたちはとても大事な経験をしたのではないかと思う。子どもたちに考える過程を提供することでミズカンナの話も思い出すことができた。つなげて考えられるように手引きすることが子どもたちには必要だとおもう。加えて、楽しく学ぶということが、もちろんすべてそうではないけれども、とても大事であると思った。

幼稚園では試したり考えたりというのをすごく大事にしている。一つの活動を子どもたちがもっと広げて考えていくというか、より豊かな学びということで、紙の上で水の表面張力を体験してミズカンナのことまで思い起こしていけるようにするためには、たとえばほかのものではどうだろうか、ほかのもので同じになるのか。いろいろな素材の上で試してみたりとかということ、幼稚園の遊びのなかでは心がけている。

ということで、一つの活動についていろいろな要素をその2時間のなかを含めたのだけれども、どちらかという幼稚園はゆっくり進んでいくので、一つの活動をいろいろ試したり工夫したりしながら、また翌日、新たなものを加えて発展させていくというかたちが、幼児には向いているかもしれない。

先ほど、言葉での表現を避けたということがあったが、子どもが楽しい経験をする、そこから大量の言葉が生まれる。子どもたちから言葉がたくさん出てくるような経験を「ポトン」という一つだけの表現でなく、さまざまに表現する言葉が出てくるような経験だとそこから創造の世界も広がって行って、実際に紙に描こうといったときに、頭の中で統合する過程を言葉で表現したりとかということで、絵に描く前にさらに違うかたちで表現していると、たぶん絵に表現しやすいのではないか。

子どもたちをみていて、絵を描いた後に話したくなり、作品を描いてそれについていろいろ自分で気付きがあって、そういう気付きを描き、そして表現されたものを見て、また気付いたことを語りたくなる。そういう時間をたっぷりとして子どもとのやりとりができるようにするのが大切と思う。

感性を豊かにするというのは、豊かな自然に触れさせるとか、きれいな絵を見せるとか、きれいなお花やきれいな水に触れるとか、いろいろあると思うが、そうしたものをたくさん見せれば豊かになるわけでもなく、言葉で表現するという作業が必要である。

やはり3、4才の段階ではとにかく体験が大事でありあまり言葉での表現を急いでしまうと、逆に出なくなってしまう。自分の感じたことを、言葉として十分獲得できていないので、この気持ちはこういう言葉、たとえばうれしいとか、悲しいとか、そういうときはこういう言葉を使うんだということを担任の先生がそのときの子供の気持ちを代弁してあげて、言語を徐々に獲得していくという時期でもある。しかし、園児一人ひとりの発達段階というのはそれぞれ別々であり個別的に対応することが必要になってくるので少数での授業が好ましい。

子どもたちは「見て、見て」と先生たちに要求して話しをしたい気持ちを強調する。どうしてこうゆう風に描いたのかを誰かに伝えたい願望がつよくある。もし、その場にお母さんが居ていろいろとやりとりできたらいいのではないか。やってみたいことをやってみてどうフィードバックをもらえるかみたいところに子どもたちの関心が向いていった。

こうした子どもたちの行動は家庭のなかにおける自分の位置みたいなのが子供の動き

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

に表れ、参加できるときというのは安心することができる。

小学校でも全く同じであるが幼稚園の時代から、こんなにいろいろなことが表れてくるというのを今回見ることができた。順調に育ちつつある子どもは問題ないが、そうではない子どものほうにどうしても目がいて、様子を見てるとすごく愛情に何らかの意味で飢えていて、それをとにかく認めてあげないと落ち着いて授業ができないんだなというのは感じた。

(環境教育に何を求めるのか)

先ほどからお話が出ているようにもう少し先生たちとお時間をいただいて、プログラムの内容についての検討を事前に行なえばよかったなという反省がある。あと、発達段階に応じた教え方についてアチスト側もよくよくもっと検討しなくてはいけないという反省もある。プログラムのゴールをどこに持っていくかというのが非常に迷った点であった。到達点をどこにするのかが不明であるとしてもプログラムを作るには、どこをどういうふうに落とし込んだらいいのかというのは、ものすごく迷った点であった。

幼稚園での環境教育という壮大なテーマのなかでどこをゴールとして、私たちが取り組んでいったらいいのかというところをもう少し先生たちに教えていただければ、次に何かやるときに生かしていくことができるかなというふうにちょっと感じた。

昌平幼稚園での環境教育は楽しい体験、そして直接体験というものが幼児のなかで心に残るといふ、そういう発達段階にある子どもたちの体験重視、特に自然体験を昌平幼稚園では重視した教育活動を展開している。自然とのかかわりのなかで子どもたちのなかで育つものはたくさんあるが、特に環境教育のなかでは将来的に環境に目を向けて、自分たちの住みやすい生活空間をつくりだしていくことができる子どもを育てたいと思っている。

そういう子になるためには、自然に触れることに喜びを見出して、自然と一緒にかかわって遊ぶことがすごく好きになることを重視している。そういう体験を通して、昌平幼稚園の庭を大人になったときに思い出せるような、昌平幼稚園の庭が大好きな子に育てるといふことが、自然を愛する心の豊かさにつながっていくのではないかととらえている。

自然を大切にする子というのは自然を愛することもできる子だから、昌平幼稚園のお庭で遊ぶのが大好きという子供を育てることが将来的に子どもと環境との間につながりが生まれるのではないかととらえている。

特に園庭での稲作の実体験をさせているが、そのなかで自然の仕組みを知るといふ知的な面での獲得も必要であり単に自然が好きになるだけではなく、そういうなかでかかわり方を少しずつ学んでいくということを大事にしている。

今回の活動では、水というものへ視点を絞ったなかで、水の大切さにつながっていくような方向に私たちが様々な幼稚園での活動に組み込んでいくということが大きな課題だと思っている。きっかけとしては、何気なく水をつかってきたけれどもお米には水が必要だということをお子たちは学んでいる。稲作を通して水の中に生き物が住んでいることも体験を通して学んでいる。

それとは別に今回、子どもたちは自分たちが口にする水というものをすごく意識できた

第3章 千代田区立昌平幼稚園 事例報告

のではないかと。水を口に含む、水を飲むということなどのいろいろな場面での水が子どもたちの中でつながりが生まれたのではないかと。

話題を変えさせていただくと、たとえば今回の手法は水を取りあげることで環境教育と位置づけて実施したが、そういう枠組みを抜きにして、幼稚園では感性画の手法はどんな領域での可能性が存在するだろうか。

幼稚園の授業には表現という大きな領域があり、そこでの可能性が一番大きい。幼稚園という表現というのは本当にいろいろな表現手法が含まれていて絵画表現や音楽の表現、あるいは言葉の表現があるがそれらすべてが表現というふうにとらえられている。その表現はあるときにはザリガニを見て描くとかイモ掘りの体験を描こうとかということもあるがそのときどきの表現にはそれぞれのネライがあるが、今回の技法《感性画》から子どもたちは学ぶことがたくさんあった。

今回、水そのものが非常に難しいテーマだったと思うが、こんな水って見てこなかったなとか、こんなふうに水を触ったことはなかったなという経験は5才になってもまた一つの驚きとして戻れるのではないかと思った。そこからもう一段発展させたプログラムの実施が必要ではないか。どこの部分を強調して行なうかが今後のカリキュラムの課題であるが、環境教育というのは連続して行なう必要があるとおもう。しかし、その連続性はどうも一直線ではないような気がする。何か波紋のように周りに広がっていつている。そういうところのとらえ方で考え直さなければいけないのではないかと思った。そして、個人個人の波紋の重なりがどこで接点を持てるかとか、そのテーマの置きどころとかが非常に難しい。

今回は水を取り上げたが、幼稚園での環境教育のテーマとして水以外にどのような内容のものが考えられるだろうか。

いろいろ考えられるけれども、活動としては水というのは多様な遊びにつながるのに向いていると思う。水を使うのは生活のなかでたくさんある。何でもやろうと思えば、風でも火でも面白いと思うが、水は季節によりもっとアクティブなかわりが楽しめる。

もし次回チャンスがあるとしたら、事前に双方が十分に検討を重ねて、幼稚園での一連のプログラムと、それぞれの年代に応じて明確な目標を持って実施する必要性を痛感した。

それから、今回一番感じたのは3才児の一番小さいクラスがよくぞこのプログラムについてきたとおもう。3才児たちが難しい課題に一生懸命になって本当に熱心に取り組んでいる姿に感動した。

(執筆担当者:山田元紀)